

支え合う世界

千葉県立幕張総合高等学校 2年 寺内アンヘル サクヤ

私は、「支え合う世界」を未来につなげていきたい。こう考えるきっかけになったのは私の父だ。

私の父はエルサルバドル人で、日本人である母が青年海外協力隊でエルサルバドルに赴任していた時、二人は出会った。私は日本で生まれたが、幼稚園から中学1年生までエルサルバドルに住んでいたことがある。よくどちらの国が好きかという質問をされるが、両国とも同じくらい大切な母国だ。

私の父も日本はとても生活しやすい国だと言っており、治安の良さや交通インフラの利便性、自然や文化等観光資源の豊かさを称賛している。しかし、残念なことに日本で辛い経験をすることもある。

父はいま、建設現場で仕事をしている。ある日、仕事の現場で道具がなくなったとき、一番先に疑われたのは外国人である父であった。また、エルサルバドルのギャングや刑務所建設のニュースを見た職場の人から「タトゥーははいっているか。人を殺したことはあるか。」と聞かれたこともある。冗談だとしても悲しかったと話した。

SDGsのほとんどの項目に関わっている多文化共生とは「日本人も外国人も区別することなく力を合わせて社会を発展させていこう」という考え方が軸となっている。各県各地域において多文化共生推進プランが具体化されてきている中、いまだに外国人に対するヘイトスピーチが存在しているのはなぜなのか。それは、日本で報道されるニュースだけを情報源にしまうと、その国に対する偏ったイメージを抱いてしまうという危険性があるからだとは私は考える。

そこで、私は2つの取り組みを行うことに決めた。1つ目は、日本人たちに本当のエルサルバドルの姿を知ってもらうための活動をする事だ。先日、学校の地理の授業では先生に協力してもらい中米の

紹介をした。郷土料理について説明すると「食べてみたい」という声があがり、休日に自宅でププサを作る計画を立てている。また、音楽の授業で、ケーナという楽器を演奏した。「コンドルは飛んでいく」という曲では、日本語の歌詞でみんなと一緒に歌ってくれた。「中南米に行ってみよう」授業の終わりに聞いた友人の言葉に嬉しくなった。こうしてエッセイコンテストに参加することも活動の1つだ。私が育ったサンタ・アナには美しい湖コアテペケがあり、コーヒー農園が広がる自然豊かな所である。コミュニティの結束が強く、私は近所の子どもたちと一緒に遊んで育った。誰の母親であっても全ての子どもを「私の子」と呼び成長を見守りみんなにハグをする。内戦という暗い歴史があるからこそ人の温かさがあって助け合いの精神が根付いているのだろう。これからは中南米の真実の姿を発信し、偏見や先入観を払拭していきたい。

もう1つの取り組みは、エルサルバドル人の友人に日本語を教えることだ。昨年からはボランティアで月に2回オンライン授業を実施している。アニメ好きな友人ばかりなのでアニメの主人公を題材にし、大学生の兄と協力して独自の日本語学習教材を作成した。言語は文化と密接に関連している。言語面からのアプローチにより異文化理解を促進できると確信している。

私はハーフであり双方の「違い」を知っている。そしてその「違い」とは凸凹の様なものだと思っている。凸が良くて凹が悪いということではない。凸凹は補完関係にあり共存することができる。互いの特質を持ち寄ればより豊かな新しい文化が生まれるだろう。異文化理解とはこの可能性に気がつくことではないだろうか。国際協力はもうすでに始まっている。周囲の人たちの「きっかけ」になること。私らしい方法で貢献していきたい。

そして、もし皆で支え合う世界を想像できたのなら、私たちにはそれを創造する力があると信じている。